夢と情熱
― 一道を行く ―

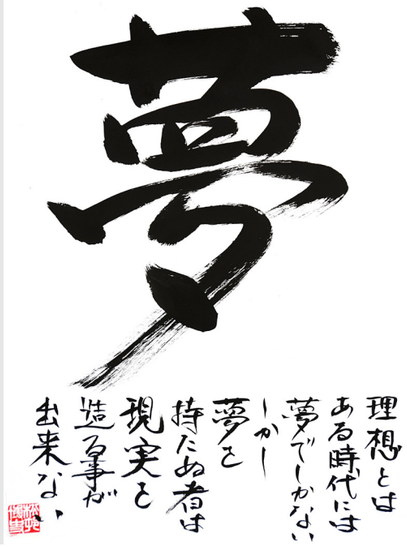
不易

Vol. 44

　閉塞感の強い世相が続いています。
故 堺屋太一氏の著書「堺屋太一の見方」が出版されたのは2004年。
その中に、「『時代が変わった』とは正義の基準と価値の尺度が変わったということだ」と書いてあり、当時、個人的にも時代の変遷と社会の価値観の変化を感じていて、妙に心に残る言葉として今も記憶に残っています。
あれから17年の歳月が過ぎ、まさにかつて日本という国に存在した価値観や正義の基準が大きく変わってしまったのは事実だと思います。
しかし、果たして日本人の民度は進化してきていると言えるのでしょうか？
「不易流行」という言葉があります。
時代と共に変えてゆかねばならない事と、変えてはいけないものがあるという意味です。
変えてはいけないものは生きる上での基本的な価値観、生き様です。
　翻って今日の日本は新型コロナウイルス感染拡大の対応の稚拙さをみても、有事に極めて弱い国家に成り下がってしまった様に思えてなりません。
かつて隆盛を極めた官僚文化が衰弱し、政治の劣化は最早、国民が期待を全く持てない程迄に落ち続け、何も決められない、誰も責任を取らない機能不全の状態に成り下がってしまった感があります。
人々の職業や物事の選択にしても、「有利」を「好き」と錯覚して決めるため、常に「損」か「得」かの基準で考え、権利の主張が異常な程に強くなり、一つの事に没頭して一道を極めてゆく人が少なくなってきている様に思います。
そうした中で、スポーツ界ではゴルフの松山選手がマスターズで優勝し、大谷選手やダルビッシュ選手、池江選手等々、日本人が世界のトップアスリートとして活躍しているのは明るい話題であります。

鍋ケ滝（熊本）

こうしたトップアスリートの若者達は、果たして、彼らの選んだスポーツを「有利」か「不利」で選んだのでしょうか。
間違いなく「好き」で選び、日夜、誰にも負けない努力の蓄積で、その才能を開花させた筈です。
好きなこと、それは疲れないことなのです。



時代が変わっても、年をとっても、常に夢を持ち続け、それに向かって努力し続ける人がもっと増えてゆけば、必ず世の中は可能性に満ちた、明るい社会になると思います。

幸せとは好きな事が自由にできる状態であり、好きな事は継続が出来る事であります。
我々個々人が自分の「夢」を持ち続け、この国を再び明るく活力に満ちた国に再生してゆきたいものです。

徳真会グループ
代表　松村 博史